

明治 22 年 2 月～3 月

天理大学人文学部講師
深谷 耕治 Koji Fukaya

明治 22 年 1 月、増野正兵衛ら兵庫眞明組（兵神分教会）は「おさしづ」を通して教会設置のお許しを頂いた。その後、2 月 8 日に増野正兵衛を会長にすることのお許しを伺ったが、「前々これまでの処話々してある。ぢば一つの理という。」というお言葉を頂く。おぢばへの移転は、正兵衛に再三論されていたことであった。その後の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・ 2 月 9 日（陰暦正月 10 日）午前 11 時：清水与之助神戸分教会長に成ってくれと、講元始め周旋方よりだんへ申込に依て、御許し下さるや、清水与之助身上より伺
- ・ 2 月 11 日（陰暦正月 12 日）：清水与之助分教会一条に付だんへおさしづを頂き、講社の談示致しとう御座りますに付、神戸へ帰ります事願
- ・ 2 月 17 日（陰暦正月 18 日）：兵神分教会所地所の処はさしづせんと御聞せ下されし処、増野正兵衛より講社一同談示の上、神戸下山手通六丁目三十八番地村上五郎兵衛地所に致し度くと、皆心を揃えて定めしも、人間心を以ては相分り申さざる故一応清水与之助よりの伺／同日、神戸へ清水与之助帰るに付願
- ・ 2 月 28 日（陰暦正月 29 日）：増野正兵衛齒浮きしに付伺
- ・ 3 月 1 日（陰暦正月 30 日）午前 9 時 30 分：兵神分教会地所並びに東京出願の事、清水与之助、増野正兵衛兩名にて願／同日同刻、兵神分教会建築及神祀るに付願／押して、井戸一箇所御許し願
- ・ 同日午後 1 時 30 分：前伺の『なかへ遠く速やか一つ運び、一つ道』又『心と心と心にある』という理は、これは増野正兵衛生国長州へ帰りて神様の御話を伝える事でありませうか、又これは悟り違いでありますか伺

明治 22 年 2 月 9 日、清水与之助の身上の障りを通して「おさしづ」を伺った。内容は、清水が兵神分教会の会長になることへの御許しの伺いであった。「今一時成るよう行くよう運んで治める理が治まる、治まらん理が治まらん。」とお言葉があり、2 月 4 日に頂いた「成るよう、行くよう。成らん道は通すとは言わん。」というお言葉と符合する。「初めあって一つ理始まるへ。」と元のぢばの理が示唆され、「治まる理を以て十分の理も治まる。」と論されている。こうしたお言葉を頂いて、会長は清水に決定された。

2 日後の 11 日、清水は、兵神分教会に専心するために講社の人たちと談じ合いをするため神戸に戻ることを伺うと、「所は何処此処ともさしづせん。道のため一つ理が十分治まる。」と論された。そのお言葉を受けて、増野正兵衛をはじめとする講社の人々は談じ合いを重ねて、「神戸下山手通六丁目三十八番地村上五郎兵衛地所」を候補地にあげた。村上の地所について清水から伺うと、まず「それへの談示が大層思うからいかん。」と述べられて、談じ合いの姿勢について論されている。その上で、「初め一つ、元一つの理、世界のため人のためなら日々見え来る、月々見え来る。」と「元一つの理」についてふれられて、「皆んな一つの理なれば、十分の思いである。」と論されている。『清水与之助伝考』によると、村上は土地を貸し出すことを初めは承知しなかったが、

「ある夜、神官が自分の家を出入りしている夢をみて、貸すことを承知した。」ようである。⁽¹⁾村上の夢を通して、実際に「成ってきた」といえよう。

10 日ほど経った 2 月 28 日、正兵衛が「齒浮きしに付」伺っている。「なれどなかへ遠く速やか、一つ運び、一つ道十分理も分り来る。一つ心と心と心にある。」というお言葉があった。このお言葉について後に再び伺っている。

翌日、3 月 1 日に、兵神分教会の地所と東京出願について清水・増野の兩名の名で伺っている。兵神分教会は、後 3 月 13 日に兵庫県知事より認可を得ているが、それに向けて東京本局管長の添書を得ようとしていた。「皆身上より運んで成程一つ安心、いつへ一つ心。」と、そもそも身上の障りで引き寄せられ、おぢばに運ぶようになったことを述べられ、「心分り難ないから、始め掛けたら一つ理、始め掛けたら治まる。十分運んで一つ十分守護。」と論されている。物事の治まりに関しては、この道を始められた親神の思いに沿うことの大切さを述べられているのであろう。

また、教会の建築、とくに神様をお祀りする方角について伺うと、「普請一条、方角どちらとも言わん。向もどちらとも言わん。大き小さいこれ言わん。大層思うからならん。皆心を寄せた理を受け取る。」と論され、井戸を設置することに関しても「心一つ、一時一つ心を揃え。これでこそ満足という。」と神の思いに人々の心を揃えることを説かれている。

その日の午後、前出の正兵衛の「齒浮き」の「おさしづ」について再び伺っている。「なかへ遠く速やか一つ運び、一つ道」や「心と心と心にある」というお言葉から、正兵衛は生まれ故郷に帰って神様のお話を伝えることか、と思索したようである。「遠くへ運び来たるという。何かの処十分運ぶ。一日一つ理を尋ね、一つ聞かす。」に、遠いところからおぢばに運ぶようにと論されていることが読み取れる。

「齒・齒浮」

『身上さとし』では、2 月 28 日の「おさしづ」について、「神戸より遠いおぢばに早く移転せよ。今は不安であろうが、やがてお道の理が十分解って来る。家内の者達（正兵衛・母・妻）の心を治めることが大切で、一名はこう思い一名はこうであるが、今一時お互いの心が治まるようにせよ。という意味で、齒浮くのは、皆の心を一つに治め安心させよ。ということを示されたのであろう。」と説いている。⁽²⁾

兵神分教会の会長も定まり、その場所も定まりつつあったが、正兵衛のおぢば移転はまだ定まっていなかった。正兵衛の文脈でいえば、齒や口中の患いはただ家内の人々の思いを揃えることではなく、やはりおぢば移転への神意に合わせることを意味していた。28 日の「おさしづ」について、正兵衛自身は「生国長州へ帰りて神様の御話を伝える事でありますか」と、おぢば移転とは正反対の思索をしていることが印象深い。

〔註〕

（1）高野友治『清水与之助伝考』天理教道友社、1983 年、196 頁。

（2）深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962 年、109～110 頁。